

道徳心理学者および教育者としての天職(その一)

—— L・コールバーグ ——

クラーク・パワー
望月幸義 訳

目次

大虐殺の影響	道徳心理学についての解釈学
道徳哲学から道徳心理学へ	存在から当為へ
当時の状況とコールバーグの論文	道徳教育に対する発達論的視点
学位論文の計画	第一部の結論
異文化間の研究	

「コールバーグは私たち弟子が歩むべき道を切り開いてくれた。彼の業績は永久に残るであろう」

おそらく、コールバーグの見解が心理学と教育に与えた衝撃に目を奪われて、彼がなぜ長年にわたって、それほど立派にかつ献身的に研究したのか、その動機については十分に理解されていない。コールバーグを知っている人ならだれでも、彼がその研究と教育計画に類いまれなエネルギーと熱情を捧げたことを証言するであろう。彼が知的に興奮しつつ、楽しみながら自分の研究を行なったことは明らかであるが、それ以上にもっと深い力に駆り立てられていた。ローレンス・コールバーグは、自分が道徳科学者と道徳教育者になるという非常に特別な

使命をもっていることを、年をとるにつれてますます明確に自覚した人であった。彼にとつて、道徳心理学と道徳教育は、それらが単に自己実現をもたらすものであるから追求すべき関心事であつたのではなく、正義という大義のために自分の生涯を捧げる手段として選んだものだったのである。

私の考えでは、コールバーグが自分自身の天職について述べている最も意義深い言葉は、彼の最初の著書である『正義のための教育——ヤヌス・コルザック (Janusz Korczak) の天職』の結びの中の言葉であろう。コルザックは、ワルシャワの二つの孤児学校の校長になるために物理学者としての輝かしい経歴を放棄した人である。道徳教育と発達論の心理学原理に献身したコルザックは、これらの孤児学校をコールバーグの公正な共同体学校と極めて類似した特色をもつ「子供たちの共和国」として設立した。ナチがワルシャワを占領した時、コルザックは病弱であつたにもかかわらず、孤児とともにワルシャワに留まることを選び、ついには処刑された。コールバーグが指摘しているように、コルザックの死は彼の愛の深さ、つまり数年間にわたる個人的苦悩を通して高められた深い哲学的精神から溢れ出る愛の深さを示すものであつた。コールバーグは、正義のための自らの運動を鼓舞し、さらに肉体の苦痛と悲嘆を慰めてくれたのが、実は苦悩から生まれたこの同じ愛であつたと述べている。私たちの短い追悼の言葉が、コールバーグの類いまれな研究、特に子供たちのための研究を促したものが、この愛であるということについて、多少とも証言になればと念願している。

アン・ヒギンズと私とで分担し、この第一部では、コールバーグの前半生、つまり一九四五年に高等学校を卒業してから一九七〇年代の前半までのことについてお話ししたい。一九七〇年代前半についてはアン・ヒギンズも触れるかと思うが、この頃コールバーグは自分の理論ならびに評価の方法論を大幅に修正した。そして、道徳教

育に真剣にかかわることになつたのである。

大虐殺の影響

コールバーグ（一九七七、一九八五、記者会見、個人的対話）は、自分が道徳心理学と道徳教育の研究を行なうようになった経緯について語るとき、いつでも、ユダヤ人の難民をイギリスの封鎖を突破してパレスチナに送り込むための活動に参加する決断をした、高校卒業直後の時期にまで遡つた。ナチの大虐殺に痛く心を動かされた、強い理想主義の青年であつたコールバーグは、自分が絶対に正しいと考えた大義のために自分の生涯を捧げたいと心から思つた。合衆国商船隊において短期間の義務を果たした後、彼はユダヤ国防軍ハガナが買収した古い海軍の砕氷船に技術者として乗り込むことを志願した。難民を満載した彼の船は、パレスチナへ向かう途中、イギリス軍に捕えられた。乗組員および乗客の残りとともに彼は、キプロスにある強制収容所に拘留された。ハガナの助力を得て、彼と何人かは逃亡し、パレスチナにあるキプロスに留まり、安全にアメリカに戻るまでそこにいた。そこで彼らは別の船を見つけ、アメリカに戻つた。

道徳哲学から道徳心理学へ

コールバーグは、キプツの生活に参加するか——キプツの生活から、彼は公正な共同体の最初のヒントを得た——、それほど厳しくなく、慣れたアメリカの生活に戻るか迷つた末に、彼は哲学的モラトリアム（猶予期間）を選んで大学に戻つた。彼の拘留の際に体験した暴力と、ハガナが戦略的に用いた暴力から生じる道徳問題に悩まされたコールバーグは、真剣に倫理的反省を続ける必要を感じた。西洋の古典的な哲学の伝統の学習を中心と

したシカゴ大学の学部での研究が、彼をして道徳的問題との取り組みを可能にした。プラトン、ミル、ロック、および特にカントの倫理的著作について熟考する過程で、コールバーグはのちに彼の道徳性の第六段階に結実していく根本的な考え方を整理していった。

大学の教職につながる大学院の研究課題を決める時、コールバーグは、哲学、法学、臨床心理学のいずれを選択するか考えた。彼は、結局、心理学に決めたが、その理由は、一つにはウィリアム・ジェイムズが行なったように心理学は哲学的関心と結びつけることができたからであり、もう一つには心理学によって他人を援助する直接的で個人的な方法が得られたからであった。シカゴ大学の大学院生として、コールバーグは当時の最高の心理学者の指導の下で研究した。心理分析の先生はブルノ・ベッテルハイム、社会学習理論の先生はジェイコブ・ゲヴィルツ、人間性心理学の先生はカール・ロジャーズであった。ピアジェの業績は、当時無視されるか、低い評価しか与えられていなかった。ピアジェの認知的発達論の紹介は哲学の講座の中で行なわれた。コールバーグは大学院の課程を終えてから、精神病院でインターンとして二年間働いた。彼が学生として、また臨床実習生として、アメリカの心理学の主流について学べば学ぶほど、その理論においても実践においても道徳的問題に関心が払われていないことにますます不満を感じるようになった。ある患者に対する主治医の公正でない態度に抗議して、それが失敗に終わった時、コールバーグは臨床心理学を辞め、博士論文執筆に集中した。彼はそれを一九五五年から一九五八年までの間に書き上げた。この論文は、未刊の論文としてはこれまで最も引用されることが多かった論文であり、ジャン・ピアジェとノアム・チョムスキーとともに一九六〇年代の三人の代表的「構造主義者」の一人として、アメリカにおけるコールバーグの名声を確立したものだ。 (Flavell, 一九八二参

照)。

当時の状況とコールバーグの論文

コールバーグの生涯からみれば、彼が道徳性の発達の研究を選択したのは驚くに当たらない。それでも、このような話題はアメリカ心理学では全く位置づけられていなかった。コールバーグは、ブラウンとヘルンシュタイン(一九七五)の次の文章を特に好んだ。つまり、彼らはその心理学のテキストの中で、同僚の心理学者がコールバーグをいつも「くだらぬやつ」とみなした理由を説明している。

「道徳」とか「行為」という言葉自体が、一種の子供にだめ、だめを強調する時代の匂いがする。……精神分析や行動主義や文化人類学に通じている現代の社会学者は、このような言葉を全く使用しない。……一つの方法としての道徳的推論は、行動主義学者が少なくとも研究上では意識していないものである (三〇七―三〇八頁)。

コールバーグの人文科学研究の背景が彼をより広い視点に立たせ、彼をして、当時の心理学的正統的な理論をソクラテスやプラトンにまで立ち戻る知的枠組に「組み入れ」させたのである。コールバーグは、この正統的理論の近視眼性を鋭く意識して、彼の同僚の社会科学者が、西洋の知的伝統における最も基本的な問題の一つである「いかにして衝動と感覚によって拘束されている幼児(無知な人)を道徳的にさせるか」の問題を重視していることを非難した。コールバーグは、道徳判断の研究はすべての社会的相互作用を規制する規範を提供するもの

であるから、その研究はすべての社会心理学にとって重要な問題であるということをも自覚した。彼は、道徳領域がもつ独自の特徴に社会科学が再び焦点を当てるようにさせ、道徳の心理学的研究を重要なものとし、さらに社会心理学への全く新しいアプローチを創始した。一九六九年、彼はこのアプローチについて、彼の心理学的著作の中で最も基本的で革新的な著作、『段階と連続性——社会化への認知発達論的アプローチ』の中で詳しく述べた。

学位論文の計画

コールバーグの博士論文には、「段階と連続性」の概要ばかりでなく、彼のライフワークの概要がそれとなく含まれている。最初の部分で、彼は「道徳」という言葉の定義に力を注いでいる。この定義は多様な哲学的伝統に適合するほど十分に広い概念であり、しかも経験的分析を続けることが可能なほど十分に狭い概念であった。彼は、行動主義者や精神分析学者が行なったように、道徳を社会規範と同一視することは、規範的視点からみても現象学的視点からみても不十分であることを強い説得力をもって証明した。

道徳性の発達に関する自分自身の理論を構築する前に、コールバーグは道徳と社会慣習の区別を明確にした。彼は、のちにトレードマークとなった形で、この区別をありふれた個人的な例で説明した。最初の例は、彼が数年間親から小言をもらいながら、どのようにして歯みがきの習慣を身につけたかを心理学的に詳しく説明したものであった。次の例は、彼の甥にクリスマスに手品の本を買ってやるという約束を時間どおりに行なうか、それとも遅らせるかという問題で直面したディレンマであった。コールバーグは、歯みがきと約束を守ることを区

別するためには、この二つの行為の根底にある動機に注意しなければならないことを指摘した。そして、彼はこの第二番目の例から、道徳的志向について以下の特徴を導き出した。

- (一) 道徳行為は倫理判断を志向している。あるいは道徳行為は価値判断によって進められる。
- (二) 道徳判断は、判断する人によって他の道徳判断よりもその判断を優先させるものとみなされる。
- (三) 道徳判断は自分自身に対する善悪の判断と関連している。
- (四) 道徳判断は、その状況における特定の行為の結果に限定されないような推論に基づいて正当化されるか、それを基盤にする傾向がある。
- (五) 道徳判断は高次の寛大さ、一貫性、包括性に向かう傾向がある。
- (六) 道徳判断は判断する人によって、客観的なもの、つまり個人や関心の相違いにかかわらず承認されるものと考えられる傾向がある。(コールバーグ、一九五八、八一—一二頁)

彼の論文の残りの部分において、コールバーグは極めて独創的な研究戦略と道徳的推論の類型を提示した。彼は道徳性の発達に関する多くの理論、特にボールドウィン、ミード、ピアジェの理論について、賛成する点と反対する点を慎重に洞察に富んだコメントをしている。彼の段階類型についての記述と評価体系はやや時代遅れなものになったが、彼がどのようにしてそのような記述や評価体系に到達したかについての説明は、彼の理論構築のアクティブ・ブツストラッピング法を理解する上で魅力に富んだ洞察を含んでいる。コールバーグは自分の研究を確実な哲学的基準に基づいて行なった心理学者として、彼の道徳的ディレンマに対する回答を驚くほど少ない理論的仮定に基づいて研究した。仮説的な類型論から出発し、データがどの程度その類型論を支持す

るかを決定するのではなく、コールバーグはそのデータから自分の類型を導き出した。彼は道徳的領域に属し、「道徳的」意味合いをもつと思われる回答を選び出し、それを個人内の回答群に分類した。次に、彼はこれらの群の整合性を説明しようとした。彼はこの整合性が「思考や評価の『原理』の基盤になっていることを確認することによって、それを他の個人の中にも見出した。後の著作において、コールバーグは、より成熟した縦断的被験者を利用し、またピアジェの理論に一層大きな信頼性を置きながら、これらの「原理」を論理的構造として記述し、これらの原理を内容と区別した。しかしながら、彼の学位論文においては、M・ウェーバーの用語を使用してこの原理を回答の理念型として記述したため、彼は、しばしば構造と内容を混同した。

今日、道徳判断の段階は常に六つであったかのように考えられているが、コールバーグはその最初の著作においては、いくつの段階として規定すべきかという問題で苦しんだ。そして結局、「類型が少なすぎる方が多すぎるよりも悪いように思われる。というのは、類型が多すぎた方が単純化できるが、少なすぎる場合には、細かい議論ができないからである」と結論している(八九頁)。彼はまた、自分が到達した類型の数は「多少とも恣意的なもの」であり、「疑いもなく、我々の母集団における変動限界によって規定されている」と述べている。これは、彼の被験者はすべて男性であるというキャロル・ギリガンの批判を予想した譲歩であった。彼は段階類型の数を増やすか、減らすか考えた末、次の二つの場合に段階の数を変更した。一つは、彼の学位論文執筆のための研究の過程において行なった変更であり(この時、彼はその数を八つから六つに減らした)、もう一つは最近の指導書を作る際に行なった変更である(この時彼は第六段階の経験的基盤を数に入れなかった)。

異文化間の研究

コールバーグは、彼の段階類型論が普遍的なものであるかどうかを決定したいと思つて、一九六二年の台湾での研究を始めとして、多くの異文化研究を行なった。これらの研究の結果、道徳的内容にみられる表面的相違の背後には道徳的推論の同一の型が存在することが分かった。この調査結果は、文化的多元主義に対する尊重が道徳的相対主義を含むと仮定していた人類学者を驚かした。

道徳心理学についての解釈学

子供の道徳的談話の研究に対するコールバーグの慎重な解釈学的アプローチは、道徳を研究するという彼の決断がそうであったように、彼を心理学界での変り者とした。行動主義者にとっては、彼が一生懸命分類しようとしたディレンマに対する回答は、学習した言語行動以外の何ものでもなかった。コールバーグがこのような言語による表現を重要なものと考えた現実をほとんどの人が理解しなかったのは、彼らが言葉と行為(この二つは異なった強化要因によって生じたものである)との間には、本質的關係は全く存在しないと考えていたからである。道徳行為に関する未熟な研究を行なうことによってこれらの批判に応えようとする誘惑に、コールバーグが負けなかったのは賢明であった。彼の段階論の妥当性が道徳的行動を予想する被験者の能力に依存している、という非難に答えてコールバーグは、その妥当性が構造規準にのみ依存しているものと主張した。彼は「精神主義」の異端に陥っていると批判されているが、道徳的推論と判断は心理学的過程として、それ自身の統合性をもっていると主張した。そうすることによって、彼は判断と行為の問題を探求する重要性を否定しているので

はなく、彼が十分に道徳判断について説明できるまで、その調査研究を延期したのである。このような基盤がなければ、その行動が観察の対象となつてゐる行為者の意図を事実的に無視してきたこれまでの研究者の誤りと同じ誤りを繰り返すことになる、ということに彼は気づいていた。彼は判断と行為の問題が重要であることを認め、存在から当為へ

道徳的思考と道徳的行為の關係が確かにあまりに複雑であり、興味深いものであるため、この關係は思考における選択から行為における選択を予想するというような能力だけで考察することはできない（コールバーグ、一九五八、一七頁）。

道徳的推論自体の研究を行なうというコールバーグの決意を鼓舞したのは、彼がインタビューし、理解しようとした子供たちに対する純粹な愛情である。行動主義者が子供について研究するために子供を統制しようとしたのに対して、コールバーグは子供に耳を傾けようと努力した。彼の講演および著作の全体を通じて、彼は、子供たちが、生まれながらに哲学者であり、我々の尊敬と注目を受けるに値するものであるというテーマに立ち戻っている。

存在から当為へ

彼の学位論文の主要な課題は心理学の領域に属するものであったが、コールバーグはその研究から生じた最も重要な哲学的問題、つまり発達の価値自身は何かという問題を切り出した。このような問題に対する解答は、彼の論文の範囲を超えているとしながらも、道徳的に高い発達段階にいる人は、人間としてより高い価値をもつてゐるといふ読者が多分もつ仮定を自分ももつてゐると付言している。事実、彼は道徳的に正しい人とはある意味で発達論的にみて成熟した人と定義できると考えたとまで述べている（八七頁）。彼がこのような直感を体系的に展開したのは、一九七一年に彼が書いた挑戦的な論文「存在から当為へ——自然主義的誤謬はどのようにして生じるか、またそれをどのようにして回避するか」においてであった。道徳心理学者は、彼らの研究を哲学的に確実な原理を基盤にして行なわなければならないことを認める一方で、道徳性の発達の「事実」が、道徳的適切さに関する哲学的要請と結びついていなければならないという論議を呼ぶ立場を提起した。道徳的推論の構造に関する心理学的・記述的分析と哲学的・規範的分析との二元論を示しつつ、コールバーグはこれらの二つの分析の収斂性と補完性を主張した。

道徳教育に対する発達論的視点

より高次の段階の方が規範的視点からみてより良いものであることを証明しようとするコールバーグの関心は、必ずしも純粹に学問的のものではなかった。彼は、早くも一九五八年に、このような証明がなければ、道徳教育に対する発達論的アプローチは正当性を欠いてしまうということに気づいていた。彼が道徳教育の実践と研究を實際に開始したのは、一九六七年ハーバード教育大学院の教授になる直前に、道徳討論アプローチについてモツシュ・ブラットと共同研究を行なった時である。それにもかかわらず、一九六六年に彼は道徳教育を発達させるための理論的根拠を概括し、道徳教育はどのような形態をとるべきかについていくつかのヒントを提示した。コールバーグは、学校が道徳教育を行なわざるを得ないという社会学的洞察から出発し、ジョン・デューイと同様

に、より高次の発達段階へと高めるための「刺激」を与えることが学校の目標であると提案した。彼はこのような目標を最も有効に促進するためには、仲間集団の相互作用に及ぼす教室の雰囲気の影響に関心を向けることであると述べた。彼は「民主的」ないし「共同体」という言葉は一度も用いていないが、彼の最も初期の著作から、公正な共同体アプローチの方向に向かっていったことは明らかである。

第一部の結論

ローレンス・コールバーグの研究遍歴についての第一部のこの短い紹介で、彼の業績はもちろんのこと、彼特有の性格についてもある程度理解していただけたのではないかと思う。コールバーグの後期の業績に対する彼の初期の関心や訓練の重要性を過少評価することはできない。ナチの大虐殺の恐怖に対抗しようとした彼の決心、普遍的な道徳原理を求めての彼の哲学的探究、聞くことを通じて援助したいという彼の願望は、心理学と教育についての新しいヴィジョン、つまり正義を基準にし、愛に鼓舞されたヴィジョンを確立する道を彼が志向する準備期間となったのである。